

富山大学の多様性を発信

とみダイバー

3月8日「国際女性デー」にちなんで、
本学初の女性事務局長としてご活躍の
鈴木理事・事務局長をご紹介します！



鈴木 規子理事・事務局長



——ダイバーシティについての局長のお考えをお聞かせください。

大学とダイバーシティに関しては、まずなんといっても変化のスピードが大きく、将来予測も困難な世界で、複雑化/高度化した課題の解決のためには様々な知の結集が不可欠！学長はよく「団体戦」という言葉でそのことを言われるけれど、大学において多様な構成員の集結が求められるいちばんわかりやすい理由はこのことだと思います。

それに加えて、大学は世の中のジェンダー規範を映し出すとともに、それを再生産する性質も持っている、といわれるけれども、それはジェンダーに限らず、ダイバーシティの状況、と置き換えても当てはまると思っています。その観点から思い起こすと、私たち大学の事務職員は直接学生を教えるわけではないけれども、まさに社会に出ていく一歩手前の学生たちのすぐ近くで、女性も男性も、また例えば障がいがあるなど多様なバックグラウンドを持つ個々の職員それぞれが、その個性や力を発揮して、楽し気にいきいきと働いている姿を示すことは、案外重要なのではないかと最近思っています。

——ダイバーシティ・インクルージョンを体現する大学であることに意味がありますね！局長もおひとりです。

あら🍷。とみダイバー第2号で紹介された稲田さんが、学生時代にご自分と同じように吃音をもつ事務職員と交流し、それを研究や進路選択に活かして、いまご自身が富山大事務局で活躍しているお話も、そのような重要性を感じさせるものでした。また本学の事務局では多くの女性管理職が活躍していることが、若い女性の県外流出がある種の危機感をもって語られる当地において、若者が、県外に出ずとも自分が将来活躍している姿を思い描けるようなことに、少しでもつながるといいな、などと思っています。



———今のご自身のキャリアや働き方につながった出来事がありますか？

いっぱいあるけれど(笑) 初めて管理職である課長になったばかりの時のこと。今から思えば当時全く管理職らしからぬ仕事をしてたんですね。自分であれこれやってしまって。それを上の方からしっかりとご注意を受けて。「それは直さないと本当にダメ」と厳しくきちんと叱ってくれたんですが、怒られたその時は何がダメなのか分かっていなくて反発もしちゃって。居合わせた別部署の部長さんが心配してお電話くださったくらい。でもね、その半年後に、なんで怒られてたかすんごい腑に落ちたんです！私が間違ってた、と。

怒られる、ってすごく大事なこともかもしれないね。私の場合は、怒られるという経験がないまま管理職ポストに就いてしまったけれど、それってもしかしたら、女性あるあるかもしれない。怒られ慣れていないから、がっつり怒られた時のショックは大きい。ただ、その場では理解できなくても、怒られて反省して、時間はかかっても一周回って腑に落ちて、というプロセスで身についたものが確実にあって、すごく大事な経験だったなと思っています。

その時しっかり厳しく指導してくださった上司も女性の方で。とっても感謝しているし、あの経験があったから今も勤めているとはっきり思います。

…経歴…

- 平成3年 宇宙科学研究所
- 平成7年 文部省学術国際局国際企画課
- 平成18年 国立大学法人東京大学企画課長
- 平成22年 文部科学省大臣官房国際課課長補佐
- 平成26年 文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室専門官

…次ページに続く



もう一つは、それまでに長く携わった分野と違う分野への異動の経験ですね。初めて国際関係部署から男女共同参画の部署へ異動することになったとき、人によっては「ノリちゃん、はずされちゃったのね」という見方をされる方もおられましたし、自分でもこれまでの経験の上で、知識を活かしてできることは全く違う分野、というので戸惑いはありました。実際に仕事文化も仕事の内容も大きく違うことで苦労もしましたが、結果的には、この異動で身につけたことで、後々の仕事の幅が広がったし、あとからまた国際の分野に戻った時、少し変わったバックグラウンドや力を備えた職員として組織に貢献できるようになったと思います。

特に、国際関係の仕事はある種、横串を指すような、ツールを如何に駆使するか、という面がある仕事なのですが、男女共同参画で、専門的な一つの分野を深めるタイプの仕事に携われたことで、自信をもって語れるサブスタンスの分野ができ、何か自信のようなものを持てた気がしていますし、違う部署で公務員として必要な様々な経験が出来たことも大きかったです。今の自分がここにいられるのはこの異動があったからだと思っています。

だから、研修などでもよく話しているのですが、もし自分がやってきた、自信をもってできることはこれなのに、違うことを要求された、というとき、それを決して悲観的に思わないでほしいです。外された…とかね。ちがうの、むしろそれは大きなチャンスだから。

…経歴(つづき)…

平成28年 文部科学省国際統括官付国際統括官補佐

平成30年 国立大学法人東京工業大学国際部長

令和 3年 国立大学法人東京工業大学企画・国際部長

令和 4年 文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室長、
男女共同参画学習室長

令和6年 国立大学法人富山大学特命理事・事務局長

令和7年 国立大学法人富山大学理事・事務局長



——ボス秘話を聞きたいです。管理職になる前となった後で、
認識のギャップはありましたか？

ちょっとナナメから答えると…職階が上がるたびにラクになっていったの！（聞き手2名「ええええー！」）

特に一番分かりやすいのは、係員の時って、なんでかよくわかんないけどものすごい作業量があるでしょ。そして、分からないことを分からないままやる状況もあるし、さらに言えば、こういうふうにやったらいいんじゃないでしょうかといった改善の提案もあまり聞いてもらえなかったりもして。でもね、それが係長になった時、この件に関してはここまでやればいい、ということが、ある程度自分で判断できるようになるし、自分が最も効率的と信じられる方法で取り組んでいい。精神的にも体力的にもとてもラクになりましたね。

その、自分で決められる量ややり方といったキャパシティが、課長補佐になるとまた増える。ますますラクになるというね！

でもね、自分で仕事をここまでと決める以上は、それを正しく判断するための総合的な理解と、やり通す責任や違った結末に至った場合の覚悟は必要だよ。うん。自分で仕事の範囲を決めてやれることの楽しさと、自分で決めなきゃいけないこととの責任感とのバランスを楽しんでほしい。でもそれがね、楽しめるようになりますよ。ちゃんと。

だからこそ言いたいことは、自分の仕事は何につながっているのかを、作業ばかり「やらされてる」と感じる人には考えてやってほしい。そして上の方には、あなたがやってるこの作業は、課長がやってるこれにつながるんだよというようなことをきちんと意思疎通して、モチベーションをもたせてあげる、これが両方に必要だと思ってます。



——局長のワークライフバランスについてお聞きしたいです。

えーっと、わりと忙しい職場が続いたので、時間的にワークライフバランスを語れるような働き方はしていなかったような気もするけど。でも、基本的に私は切り替えが早いんです。帰路についた瞬間にスコーンと忘れて「何食べよっかな」とか考えている。あとは、先ほども話しましたが職階があがるほど、自分で責任をもって仕事をここまでと決めることができる。仕事に対する納得感がないまま、仕事の量だけ多かったときは辛かったですよ。でも納得感があって仕事をしているうちは、ワークワークバランス？でも幸せとのバランスが取れて、おのずとワークライフバランスにつながってたのかもしれないですね。

あとね、こなすべき仕事があるとき、今求められているのはその仕事で120点とることなのか、それともまず60点に到達しておくことなのか、先に見極めることが大切だと思います。すべての仕事をすべての人が同じ基準で120点を目指さなければいけないことってあんまりない気がします。人には個性・特性、それぞれ違った力があるのだから、その人の中の頑張り60点と、別の人別の形の60点の努力、それらを足していったら、組織全体で結構いい線いっちゃったりするし、十分成長すると考えています。もちろん120点を求められる場面もあるけれど、いつもではないはず。

私はまあだいたい、まず期限内に60点をとりにいく。そのうえで、無理なくできるインプットでその質を上げていく、というスタイルを理想だと思ってやってきたかな。





——富山大学の職員にメッセージをいただけますでしょうか。

事務職員って3年間とか割と短いスパンでいろいろな部署を回るじゃないですか。その中で苦しい部署だったりも経験すると思うけれど、まずは自分がいる場所で、自分の努力を続けることで、いつの間にか光が見えるような経験を私はしてきました。先輩がおっしゃっていたすごくいい言葉があるので、受け売りですけどご紹介したいです。「行った先で常に目を大きく見開き、自らがよりよい存在であろうと思えば、きっと有意義な結果はついてきます。」

あ、いい言葉をもうひとつ。「今はおどり場にいると思え」って。いいでしょ!?今、元気ないなという時はそれはおどり場にいるんだと思って、休憩したり方向転換したり。そうして階段が登れるようになったら登ればいい。できる時にちょっとだけ背伸びして上を目指す、そしてまたおどり場。結局そういう自分なりに、無理しすぎないパターンの繰り返しで、自分も成長するし、その過程を通じて組織にいつの間にか貢献できるのではないかと思っています。

あとは、私は富山がこんなに楽しくて豊かに暮らせる場所とは知らなかった！そして富山大学も、地域と大学の将来を見据えて改革努力を続けている大学であるということ。それをぜひ、富大の職員さんたちにはもっともっと外へ向けてアピールしてほしいです！

私は、2年間とっても幸せでした 🥰

——鈴木局長、ありがとうございました！

